

ガクとチキ
学校と地域をつなぐ教育広報誌

第8号
2019年9月発行

がくち



清く伸びてゆく 狛江第三小学校



ガク★チキ探訪

狛江第三小学校



狛江第三小学校（通称三小）は、まちの南側、小田急線や世田谷通りよりも南側に学校がほしいという地域の人たちの思いにこたえて昭和32年10月に開校しました。

その名のとおり、狛江で3番目に開校した小学校で、開校当時の学校周辺は、一面に田んぼが広がり、校舎は小高い丘の上に建てられました。



昔の校舎（昭和43年）

三小といえばやさきやま矢崎山。矢崎山という名称を見聞きしたことはありませんか？

例えば学校の入口で来校者を迎えてくれる花壇は「矢崎花壇」と名付けられています。

なにより、三小の校章は、勾玉と剣で表した「小」の字を鏡を表す丸い円で囲み、矢崎山にちなんだ三本の矢を配して三小を表しています。



矢崎花壇
PTAの有志が手入れをしています

この矢崎山とは、実は三小が建つ場所のかつての地名になります。

地名の由来は、源頼朝がこの地に狩りにやってきて放った矢が突き刺さった場所だからとも、向ヶ丘の丘と成城の丘から放った矢がこの地まで届いたからとも、学校の建つ小高い丘の先端が矢の先のようなからともいわれています。

『遠野物語』の著者として有名な民俗学やなぎだくにおの柳田国男氏は、『地名の研究』という著

書の中で、「矢」という言葉について興味深いことを述べています。「矢立」という地名の由来を説く中で「矢」という言葉は土地の境を意味していたというのです。

はたして矢崎山の地、三小のこの地が、猪方・岩戸・駒井の境であるのは、単なる偶然なのでしょうか。

ちなみに、三小の校門は、猪方・岩戸・駒井の方面にそれぞれ配されています。



西門すぐ脇の坂道

西門のすぐ脇の道は南側に緩やかに下がっています。また、三小に向かう郵便局前の通りもなだらかな坂道になっています。三小が小高い丘の上に建っていることが感じられます。ちなみに、矢崎山にはかつて古墳があったなどともいわれています。

副校長の一日

学校のリーダーである校長先生、勉強を教えてくれる先生、では副校長先生はいったいどんな仕事をしているのでしょうか？

実は、校長先生を補佐し、先生のサポートをしてくれる副校長先生がいるからこそ学校は前へ進んでいるのです。

そんな副校長先生の仕事を^{きしだ かずゆき}知するため4月から三小の副校長に着任した岸田和之副校長先生に密着！

ある一日の動静を追ってみました。

○ 8:00頃 ホウレンソウ・タイム

※ホウレンソウ…報告、連絡、相談

○ 8:15 職員朝会

○ 8:20 ホウレンソウ・タイム



朝会の後にはたくさんの先生方がそれぞれ副校長先生のもとへ。

一日の始まり、先生方とのコミュニケーションをとる大切な時間です。

20分休みにも校長先生や先生方と「ホウレンソウ」。「ホウレンソウ」はひっきりなしです。

○ 8:35 デスクワーク



時間を見計らい、多くの事務仕事をこなしています。

○ 9:10 施設確認



プールの水質を確認。こんなこともしているんですね。

○ 9:15 デスクワーク

○ 9:30 来校者対応の準備

○ 10:00 教育委員会との連絡



この日は防災行政無線のチェックに対応。

○ 10:05 校内巡視



校内の巡視も欠かせない仕事。授業の様子を確認しています。

この日は2年生のとうもろこしの皮むきがありました。



○ 10:25 ホウレンソウ・タイム

○ 11:15 来校者の対応



少人数学級の視察のために教育委員会から指導主事が来校。

多くの来校者の対応をします。

○ 11:40 ホウレンソウ・タイム

○ 12:15 昼食

○ 12:40 校内巡視



給食の時間には子どもたちの様子をうかがいに。子どもたちとコミュニケーションをとる大事な時間です。

この日は午後から一小と市役所に出張（密着取材はこれにて終了）。

副校長先生の仕事は、校務の様々なこと、はつきり行って盛りだくさん。

そんな副校長先生が重要な歯車となって、校長先生のもと、先生方は一致団結してより良い学校を築いています。

新副校長×旧副校長

昨年度まで三小で副校長を勤めていた伊東先生と新たに今年度副校長に着任された岸田先生が副校長としての熱い想いを語ってくれました。

—教員を目指したきっかけ、志した理由—

【伊】もともと学校が好きで、高3の時、教員をしている先輩に「教員っていいよ、君だったらできるから！」と言われ、おだてに乗ってしまった。大学は教員養成課程ではなく文学部出身です。大学4年生で教育実習に行ったんですけど、その時に「授業っておもしろい、もっといろんなことを考えたり勉強しながらやっていかなければならないものだ」と教えてもらった。それで、「よっしゃ！もっと良い授業ができるようになりたい、部活動で子どもたちと一緒に頑張っていきたい」と。だから誰かをこうしていきたいというより、自分自身で良い先生を目指していきたいなと思ってました。

【岸】僕の場合、小中高とすべて先生に恵まれて温かく育ててもらったので、人と関わる仕事がしたいと思っていました。教員になろうという思いは全くなかったのですが、将来を考えたとき「人に関わる仕事、うん、先生も良いな」と思って。最終的になろうと決めたのは教育実習なんです。教育実習で目の前にいる教員の姿に感銘を受けました。思春期の子どもたちは自分でどうしたらいいかわからない、とまさに悩んでいるんですよ。そこに全力で関わる教員の姿を見て「いや～も～自分は子どもが好きだし、人に関わっていききたいな」と思っているし、子どもと向き合って一緒に成長したい！こんなに素晴らしい職はないだろう！と、教員になることを決意しました。伊東先生同様、小学校の教員養成課程出身ではないので、振出しは高校の生物なんですよ。大学を卒業して、高校と中学の教員をしながら、小学校の教員免許を取得しました。

【伊】共通することが多いですね。大変だっ

たのでは？

【岸】振り返ればよくやったと思いますが、その苦勞にかえられない子どもの魅力、教員の仕事の魅力がありますよね。だからこそ頑張れたのかな。

【伊】当時、教員採用選考は入口の狭き門だったので、みんな苦勞しながら目指してた。僕もね、最初は高校の講師だったの！その後採用されて中学校で26年間。お互い、小学校、中学校、高校を経験してますね。

【岸】教科担任制の中高は似た空気感があるんです。一方で小学校は職員室に一体感というか、全員で作り上げる感がありますね。何より小学生は、人懐っこくて、本当に可愛いですよ。

【伊】校外で会うと「あー副校長先生！」って嬉しそうに手を振ってくれる。「僕、スターになったんじゃない？」って思っちゃうくらい(笑)反対に中学生だと顔を背けられる感じ(笑)小学校と中学校では、子どもの存在が先生にとって違うし、子どもにとっても先生の存在が違います。小学生は先生を信頼している。特に低学年は、理由が分からなくても先生が「ダメ」や「気をつけなさい」と言ったら、素直に従う。中学生にとって先生は「自分たちがやりたいことを止める人」、「やりたくないことをやらせる人」というマイナスイメージな存在。それでも内心では、「自分の求める先生」を強く求めている。内面で頼り、表面的には拒否している。思春期の発達段階ですよ。

—副校長の仕事—

【岸】伊東先生は副校長として初めていらした小学校、どんな違いを感じてますか。

【伊】最初は小中の違いに加えて、副校長の仕事も分かってなかったのが、職員室の真ん

狛江の先生はもっと自信をもっていいよね (伊東)



いとうじゅん
伊東 純 先生
旧・狛江第三小学校副校長
(現・緑野小学校副校長)
☆出身地 東京都八王子市
☆初任地 町田市(町田市立薬師中学校)
☆趣味 車やオートバイに乗ること
☆座右の銘/好きな言葉
何事も 止めず 休まず あきらめず
(剣道範士 千葉 仁 先生)



きしだかずゆき
岸田 和之 先生
現・狛江第三小学校副校長
(平成31年3月まで狛江第一小学校教員)
☆出身地 兵庫県
☆初任地 神奈川県内の高等学校生物教員
☆趣味 マラソン
☆座右の銘/好きな言葉
継続は力なり

先生たちに向かってありがとう、そんな気持ちになります

(岸田)

中にある副校長席に座って下を見ながら「誰か近づいてくるな～来ないで来ないで」って(笑)狛江の先生たちは力のある人が多いから子どもたちの学習指導面で特に心配はなかったの、それは楽でした。

4月から副校長になった岸田さんは、まさにこの感覚を味わっていると思うけどどうですか？

【岸】学級担任のときと仕事内容が全く違うので、見える世界が変わってみれば、自分が感じるものが今までとは全く違うな、と。やっぱり緊張感が毎日ありますよね。

【伊】次に何が起こるか分からないという心構えがありますよね。だから今日一日こう過ごそうと思ってても、はっと気づくと全然違う一日を過ごしてた、みたいな。

【岸】一日に3回、朝・お昼・子どもたちを帰したあと、副校長席に、先生が報告や相談にいっぱい来ます。この時間すごく大事なんですよ。ここでホウレンソウ(報告・連絡・相談)ができることによって、学校がうまく回るんです。先生がいる時でないとクラスの様子や先生の想いを直接聞くことができないので、先生とのコミュニケーション、これはもう第一優先です。

【伊】学校の先生って真面目な人が多い。だから、上手くいってることより、上手くいってないことの方が気になっちゃう。これって先生の特性だと思うし、逆にそれがなきやいけないのかもしれない。だから、先生たちに対して「上手くいってますよ、その延長線上で上手くいかないことがあったとしても、自信をもって今のままやってほしい」といつも思っています。自分のやっていることに自信をもちながら、向上心をもって頑張ってもらいたいと。

【岸】良いところをどう引き出してどう繋げていくか、副校長にかかっているのかなと思います。まだまだ僕は経験も浅いので、これから勉強だと思っています。

【伊】先生たちにとっての良い環境を整えていくことが一番ですね。

【岸】学級と同じですよ。学級は「今日も元気に子どもたち来てくれるかな」、それが職員室は「今日も先生たち元気に来てくれるかな、今日はどんな顔して来るのか

な」と。先生が笑顔で子どもたちに向き合っている姿を見ると、嬉しくなりますよね。そういう時は先生たちに向かってありがとう、そんな気持ちになります。三小の職員室ってすごく温かいんです。これは僕が創り出したのではなく、前任の伊東先生を中心に、職員室づくりがあったからだと思います。荒川校長が「チームKoma3」とよくおっしゃいますが、縁あって同じ職員室にいる先生の良さを結集して、子どものために全力で取り組む職場にするために、副校長として、繋ぎ役になりたいです。

—狛江の子どもたちについて—

【岸】例えば自然な形で「こんにちは」とか、「～先生!」というコミュニケーションができる、狛江の子ってすごいなと思います。休み時間は校庭に出て汗だくになって遊ぶ、気持ちを切り替えて、授業は集中して受ける、そこは狛江の子の共通点ですね。

【伊】狛江全体に一体感がありますよね。地域の方、教職員、行政が一体となって創り出している狛江流の教育みたいなものが本当に根付いているなと思います。

だから、狛江の先生はもっと自信をもっていいよね。

—三小の魅力—

【伊】三小は、地域コミュニティーの中心のような場になってますね。

【岸】運動会で熱中症対策としてテントを立てることになった時、町会の方がすぐに「貸しますよ」と。設営は、ってなると今度はおやじの会やPTAの方がさっと動いてくださる。そんな結束力というか、連携というか、地域の力をすごく感じますね。

【伊】僕も中学校から三小に来たばかりの時、小学校のお父さんお母さんたちの力ってすごいなあと感動しました。

—伊東先生から岸田先生にエール—

【伊】三小は地域も含めて子どもたちを大切にしていける「子どもファースト」が受け継がれているので、狛江をよく知っている・若くて・明るくて・優しくて・優秀な岸田先生がその伝統を継承していく、一番ふさわしい先生です。

【岸】すごいプレッシャーだなあ(笑)



三小×東京農業大学



三小には約50平方メートルの田んぼがあり、平成30年度より東京農業大学の上地ゼミのご協力・ご指導のもと、5年生が田植えから稲刈り、脱穀、そして実際に食べるところまで行っています。

農学部の上地教授と16名の学生が、もともとあった田んぼを何日もかけて掘り起こし、土をふるいにかけたり、たい肥、土、苗などを持ち込み、田植えまでの準備をしてくれました。

上地ゼミでは、稲栽培における窒素の有効利用について栽培実験をする傍ら、子どもたちへの食育を目的とした「おコメプロジェクト」と称する活動の一環として、ゼミ所属の学生が小学校に出向き、稲作の授業を行っています。今回は教授の研究室に訪問し、上地教授とゼミ生の菅野伸二さん^{すかの しんじ}から話を伺いました。

一稲作を通じて児童に学んで欲しいこと

今の子どもたちは、あまり土いじりをしたことがない子も多くいます。この体験を通して食べ物のありがたみを身をもって感じ、農業や生き物の大切さ、そして命の尊さを知ってくれればと思います。

農業は皆で行うので、子どもたち同士での連帯感が生まれたり、日々、育っていく稲の様子に驚きの感覚を味わうことで、喜怒哀楽などの感情が生まれ、素直な心が育まれていきます。さらに自分で作った米を食べるという経験は児童にとって特別な経験であり、愛着心が生まれてよりおいしいと感じることが出来ます。また小学校5年生という年代で体験すると、大人に

なっても記憶に深く残り、その後の児童の健やかな心の成長につながっていくと思います。

一学生と児童の関わり合い

ゼミの学生は授業以外のときも、夏休みに田んぼの様子を見に小学校へ足を運んだり、水の管理をしたり、児童との交流を楽しみながらもお米の大切さや食べることの楽しさを伝えていきます。児童にとって大学生は、親近感が湧き近い目線で教えてくれる存在です。学生のなかでも教職を目指す者もいますし、熱心に小学校に足を運んで、児童との交流を深め、その経験を学会で発表する者もいます。現在は16名ほどのゼミ生で年間を通して三小の稲の生長を見守っています。



かみじ よしあき
上地 由明 教授
東京農業大学
農学部
農学科農業生産分野作物学研究室
☆研究テーマ
水稻栽培における合理的窒素管理に関する研究
イネの低環境負荷型栽培技術に関する研究

田植え

皆で力を合わせてまっすぐ苗を植えました。



中学生のころ農業に興味を持ち、高校生のときに実際に体験をする機会があって、農の道を志したという現在4年生の菅野さんは、「子どもたちに何かを教えるという経験は初めてだったので楽しかったです。普段食べているお米に関心を持ってくれる子が多く、やりがいがありました。子ども同士で教え合うなど、工夫しながら作業をしている姿が印象的でした。田植えのときに田んぼをはだして歩き回るのがとても楽しそうだったり、お米の知識を教えると素直な反応が返ってきたりと、新鮮味があって良い刺激を受けました。今後、子どもたちが将来の進路を決めるときに、この経験を思い出して、農業を選択肢の一つにしてくれる子が一人でもいれば良いな。稲作体験が農への興味、きっかけ作りになれば。」と語ってくださいました。



稲刈り

6月に植えた稲はすっかり大きくなり、いよいよ稲刈りです。児童や東京農業大学の学生さんたちが稲の生長を見にきて、水の管理をしたり、すずめに食べられないようネットを張ったりしました。

稲刈りは、学生さんたちに教えてもらいながら、鎌を持って刈っていきます。皆で協力しながら稲刈りの体験をしました。



天日干し

刈った稲を天日干しにします。10日ほどお日様に当てることでおいしいお米ができます。



脱穀・もみすり

乾燥させた稲の脱穀作業を行いました。東京農業大学から持ってきてくださった脱穀機、もみすり機を実際に使ってみました。



皆で育てたお米を精米して学生さんたちが持ってきてくださいました。

お鍋で炊いて、ついに学生さんたちと一緒に食べました！

自分たちの手で作ったお米はとびっきり美味しかったです!!

三小×地場野菜

三小では、狛江の野菜を使った食育の授業を行っています。
食育とは、様々な経験を通じて「食」に関する知識や理解を深め、健やかな食生活を身に付けることです。

バランスの良い食事を考えて調理したり、自ら育てて収穫した食材を食べたり、自然の恵みや四季の変化を楽しみながら、「食」を大切にする力を養う取り組みを行っています。



7月10日に、2年生がとうもろこしの皮むきを体験しました。栄養士の島貫郁実しまぬきいくみさんが収穫したままのとうもろこしを見せながら、実がどこにできるのかをクイズで確認。その後、皆で皮むきをしました。



皮をむいたとうもろこしは、給食調理室で茹でて、全学年の給食になりました。



7月13日には、2年生とその保護者が一緒になって、狛江の野菜を使った餃子ピザを作りました。子どもも大人も笑顔いっぱい、楽しみながら調理し、皆でおいしくいただきました。

